

特116

953

橘旭翁作譜

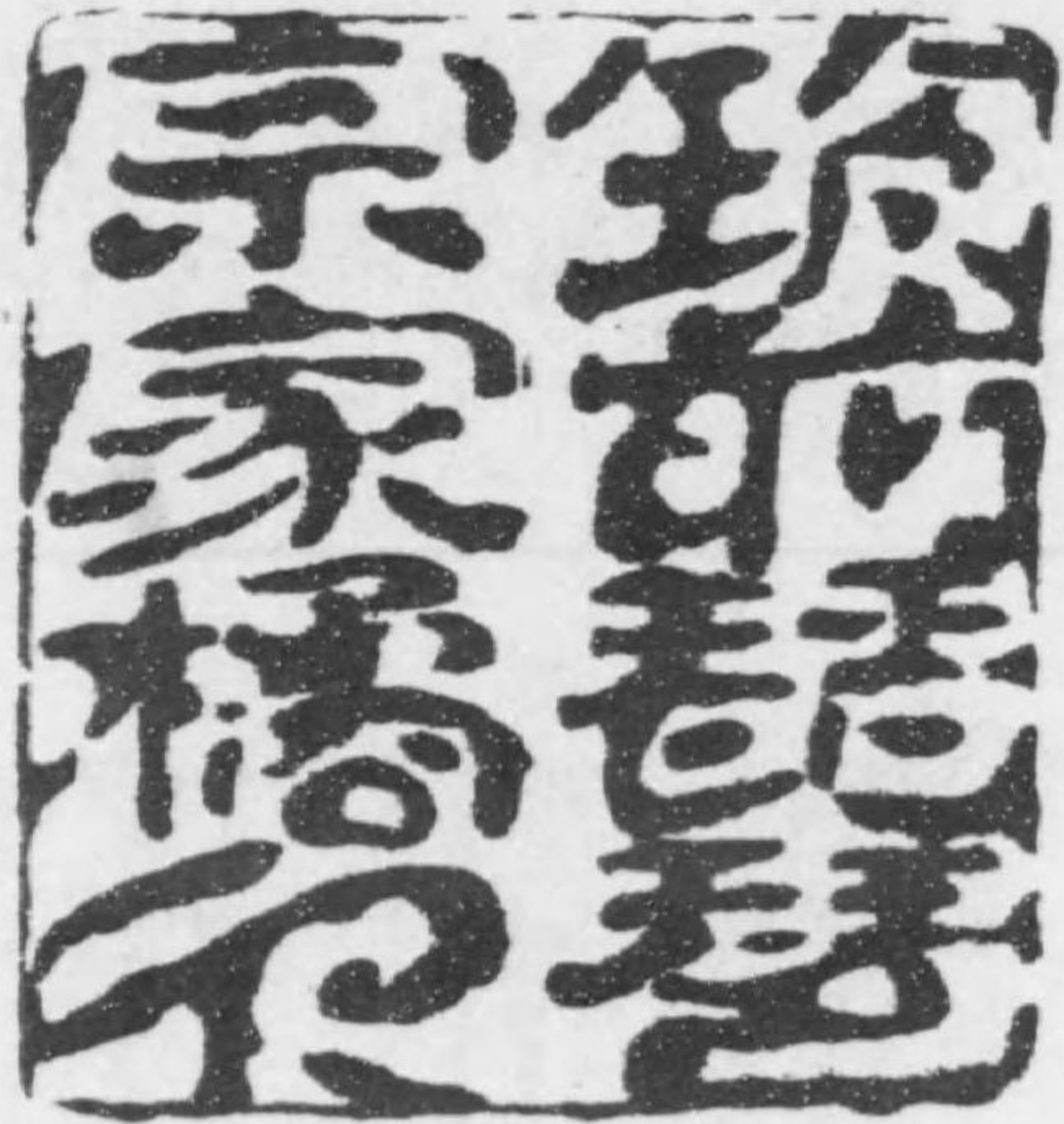
菊の礎

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18

始



持116
953



曲

一、二、三、四、五、六、七、甲、乙、音調

鶯雁白波時雨、如き類
其他何号何番何子等
合の手

春、夏、秋、冬、旭
節の名

雲、露、月、夕、日

大落し
小落し
山嵐し
五絃調
吟替
流し
悲し
戦又は
續句
き切

譜

上上げ
下上げ
尾上
尾下
引上げ
引下げ
引上げ
引下げ
淘上げ
淘下げ
淘上げ
淘下げ
強み

菊の礎

遠色玉蘭氏作

開三
元弘三年閏二月

三
恐多く後醍醐天皇は

二
隠岐より遁れ出させて

三
伯耆潜幸あらせられ

三
檄を下し勤王の師を

四
四方に募らせ給ひけり

四
茲に肥後の國菊の城主

二番
菊池入道武時は

綸旨を拜し慨然とて

嗟乎天下万乘の君

五 賊臣に苦められ給ふ

四 なんと救ふ奉らざるべきと

三 急かき少貳貞経

大友貞宗と謀り

四 義兵を舉ぎし旨を奏し

密に戦備にかりけり

七 然るに此企何時か世に

五 筑紫の探題北條英時

六 菊池入道の舉動を恠む

四 博多早下さえず由國は

三 武時徐かに思ふ様

六 先んずれば人を制し

五 後るれば人に制せらるる

四 いざ此方より打ち出ん

いそぎ馬引け馬に鞍

甲 おきてもねても忘れえぬ

六 醜の醜草踏みだき

五 大御心を安め奉らんと

金

金土

六番

十七号の上

土

天地

金

夏、勇めばいさむ嘶きに

下、博多間近く押寄けり

五、總勢百五十騎打揃ひ

館を目指し突進せり

六、櫛田の祠前を今將に

中、駒のあがきもいと速く

六、此時嫡武重を好む

姪の濱なる探題の

七、先陣打たせる武時は

五、よまらんする時あわれ

六、乗りつる馬は何物にか

四、打ど翻れど進まばこそ

甲、されば武時氣を焦ち

逆賊を討んとす

五、何の咎の有るべきぞと

五、おぢや志つらん畏縮して

唯だちくいと後退ざる

五、我今君の御ために

六、神前を乗り打すれどて

五、鎧矢番ひ鬘り紋り

大打

十九丁

神の扉をひょうと射てかみ とびら

四番

武夫の上矢のかぶら一筋に四ものいふ うはや

思ふ心を神は知るりんおも こころ

斯く高く唱ふれば七 かく たかふおきや馬は競ひ立ちうま 大きほ た

いと勇しく馳せ返けりいさま へは程なく館寄近づきほど 四やかた より ちか

風車金土

水

北條方の者共承はれほうでうがた ものども うけたま

我は菊池寂阿道武時われ きくち じやくあ だうぶとき

今度帝の御味方とてこのたびみかど おんみかた

逆臣誅伐行向へりさやくーんちうばつ へりむか

大音聲に呼はつたりだいおんごやう へま

いふや襲れと下知ればいふ や 襲れ と げち

士卒先を争ひ亂入りしそつ さき あらそ みだれい

縦横無盡に雑拂へりたけうわうむ ぜん へなぎはら

原より不意の襲撃なれもと ふい い 襲撃 なれ

賊將北條英時もぞく しょう ほう へい とき

五 防禦の力は盡きて

四 二股武士の少貳大友等

四 北條を援けんと馳来り

四 前に進みし肥後勢も

五 火花を散らし戦ひける

四 自殺なきは折しもあれ

四 菊池との盟約背き

三 武時の本陣に所かれば

二は大事と引還へし

四 武時敵軍をきつて見て

四 恐き少貳大友の崩壊共

五 怒髪逆立ちあせれども

六 すでに難儀見てかば

三 ヤ武重近う寄れ

五 我れ亡からん其後は

六 いでて伐て呉んすと

六 寡は衆に敵し難く

四 樹陰に嫡武重を招き

四 今父が死すとき節来れ

六 亂臣賊子の世とならん

三 汝是より肥後還り

兵を聚め城を固め

三 誓て賊を滅ぼせよ

七 君への忠父への孝

五 何ははこれに優るべき

四 妨げ無き内早落ちよと

五 諭し給と武重は

一 頭を掉りて肯き入らず

五 御教訓はなること乍ら

六 此場に至り父上を棄て

八 いかでおめく還らるべき

四 武重こそ御身代りて

真先討死致候けれ

一 許させ給と否受けけれ

六 武時聲をあらげて

五 汝の申所は親子の積習

六 我は君の御為天下の為

五 汝を殘さんとこそ思なれ

三 死すべき時は今身の終は

疾往かずやと促され

水地天

十八号下

火土金水

九番下

四号

地

七 武重今は是非なくも

地水

五 さらば仰随ひ奉らん

十九号下

四 一身族共を捧げて

君の御為に盡候と

土

旭 上 くもれる聲に時ならぬ

下 時雨は袖にかりけり

時雨

四 武時がて笠印をさきり

金

四 故郷に今宵ばかりの命とも

知らずや人の我を待つらん

七 ☆ 斯なむさらりと認めて

金

四 武時は母の遺念

十八番水

三 かりて母に渡せかし

一 とくしねと追きられ

十四号

五 名残盡ねど詮方も

六 なり武重辭去れば

土

三 後次女を見送りて

十五号下

七 これ今生の別れかと

地

六 たけとき ぎすが豪氣の武時も

五 暫し暗涙に咽ひけり

十四号下

四 たけとき やくありて武時は

四 ヤマシ者共つづけやと

水

六 たけとき 渦巻く賊軍の真中

五 葛地に所り入りて

六 たけとき 阿修羅の如く荒廻る

甲 奮戦激闘数合の後

六 たけとき 敵と生命をとりかひや

五 犬の馬場の片頭に

六 あはれ四十二才まで

四 終に討死たりけり

十五号

甲 惑はぬ色の白菊は

六 散りしとどき咲のる

水地

上夏 蕾未伐の香をどめて

三 北風すさむ夕はも

中 たく霜さゆる朝はも

下 かけでよそにうるはぬ

雁

上春 かたき心はつらなれる

中 下枝の末に傳はりて

264
181

大正三年一月二十四日印刷
大正三年一月二十六日發行

橋 旭 翁 作 譜
筑 前 琵琶 歌
著作權
所有
不許複製

發行者兼	印刷者	印刷所	發行所
東京市麴町區一番町三十二番地 橋 一 定	東京市京橋區築地二丁目二十一番地 畑 中 爲 之 助	東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光印刷株式會社	東京市麴町區一番町三十二番地 橋 筑 前 琵琶 宗 家

定價 金貳拾貳錢

下
朽ぬ名譽はまれや万世よろづよに
三
忠義ちうぎの電鑑でんかんと仰あはれかるらん

五
忠義ちうぎの電鑑でんかんと仰あはれかるらん
主

終

